

(財)日本クリスチャンアカデミー 関西セミナーハウス

活動センターだより

2008年度 第2号 (11月30日発行)



2008年度 もみじまつり

2008年11月23日 (日・祝) 9:00 ~ 16:00



天候にも恵まれ、赤く染まった樹々に彩られたハウス構内全体を使って、今年も もみじまつりを開催することが出来ました。下村満智子さんの聖書物語を題材にしたステンドグラス作品の展示、岩田英憲さんと田中洋太さんのパンフルートコンサート、そして恒例のお茶席やお琴の演奏、いずれもご来場者に喜んでいただくことが出来、感謝です。(事務局)

2008年度 第1回 人生の朝と夕べをいかに生きるか

「人生は信じたとおりに」

7月25日（金）18:00～7月26日（土）12:00

講師：春名 康範（大阪水上隣保館・キリスト教社会福祉専門学校校長）



講師は春名康範氏。ながい牧会と教育現場における豊富な経験をとおして、独特の信仰的世界を訴えてこられたことで知られ、その活動に惹かれての参加者も多かった。また講師と中高時代に教会活動をともにされた方々

の参加もあり、全体に同窓会のような和やかな雰囲気の中で講演が始まった。

二日間にわたる講演では、聖書が適宜引用され、その都度、講師オリジナルのクイズが出題されたことで、参加者は巧みに講演に引き込まれていった。クイズは全部で十五問の出題であったが、聖書の原語から童話、記憶のメカニズム、身体感覚や中世の修道院、歎異抄の世界にまで及び、多岐にわたる内容が語られた。これらの多様な語りによって、講師は、多層に折り重なる人生の諸相を描き、その奥に潜む人間の弱さ、醜さ、愚かさに語りかける聖書の世界を示された。

それは、達成されることのない欲望に支配された人生ではなく、わずかなものによっても満たされる幸福な人生のことであった。二度の講演は、「人生の夕べに」、「人生の朝に」との主題のもとに展開されたが、講師はこの順序のように、人生の夕べを迎えてなお希望が豊かに与えられていることをさまざまな事例を挙げて強調された。

二日目の「はなしあい」で、キリスト教

精神がキリスト教主義の社会施設や学校などで形骸化されつつある現状に話題が及んだときは、創建時の精神であるキリスト教を押しつけられたように感じる学生、生徒、あるいは同僚への配慮も必要であることを訴えられたことが印象深い。それは現場で誠実に悩んでこられた講師の率直な気持であった。

恵まれた環境のなかで、参加者は非日常の出会いを経験し、その親和感のなかで、互いの人生を語り合い、理解し合えるような意識ももつことができた。一泊プログラムならではの夜の歓談、朝の散策、また静想のとき（今回は鈴木和哉日本キリスト教会吉田教会牧師による奨励）なども恒例となり、講演だけではなく、プログラム全体を豊かに共有することができたようにおもわれる。

宿泊者は17名ではあったが、部分的な参加も含めると26名となり、ようやく本シリーズも定着しつつあるようだ。

報告：中村信博



参加者からの希望に応じてマンガを描く春名氏

《参加者アンケートから》

クイズなどまじえていただきながら、楽しく味わい深い講話をしていただき有難うございました。福音の大衆化という観点で示唆を与えられ、感謝でした。

「バッハとブルトマン ～ 二人のBと共に考えたこと」

2008年8月1日（金）18:00～8月2日（土）12:00

講師：川端純四郎（元東北学院教員、日本キリスト教団讃美歌委員）

今年度の1泊セミナーは、宗教学者であり、バッハ研究者、教会オルガニストでもある川端純四郎氏を招いて行われた。ブルトマンとバッハという共通のイニシャルをもつ二人との対話を続ける中で考えてきたことについて講演していただいた。

第1日目は、東北学院大学文学部で35年間にわたって講義されてきた経験から＜ブルトマンとの対話＞。牧師家庭に生まれながらも、自称「軍国少年」として育ち、小学校6年生の時敗戦を迎える。敗戦の日、万世（万歳）と叫ぶ朝鮮人労働者の人々がいたことが今も脳裏に焼き付いていると言う。高校2年の時に受洗。大学、大学院時代は、ドストエフスキー、キルケゴールや実存哲学を学び、研究したけれども、それは歴史や社会から目をそらしたものだたと述懐している。



25才になると、ドイツ政府の招待留学生となつて、マールブルク大学に留学。その貨物船での船旅の途上、東南アジア、アラブ諸国に寄港し、アジアの飢えと貧困を目の当たりにする。骨と皮だけの痩せこけた700人を超える子どもたちに行く港々で取り囲まれた。彼らを見捨ててドイツへ行くことに大変胸痛んだという。

ドイツでは、ブルトマンのもとで学び、

家庭に三度招待されたこともあった。ブルトマンの神学である非神話化の方法は、どんな人も自らが背負い込んでいる先入観なしで聖書を読むことができないのと同様に、聖書の著者が背負っている前提の神話的世界像を理解し、神話の背後にある聖書の使信の意図を取り出し解釈するものであると述べている。古代の神話的世界像を非神話化することによって、聖書が各自の実存に語りかけて自己理解を促し、主体的決断を迫ることを学んだ。しかし、ブルトマンにドイツの植民地支配について尋ねた時、満足の得られる答えは得られなかったと言う。

マールブルクでは、南京大虐殺で家族を失った中国人に出会った。その人の前で、何も言えない自分を知り、日本の歴史を否応なく背負わされている自分の責任に気づかされた。その後、宗教哲学、経済学を学び直し、政治運動にも関わるようになったと言う。

1日目の晩は、鈴木和哉牧師（日本キリスト教会吉田教会）の好意により、貴重なリードオルガンが用意され、川端氏の味わい深いオルガン演奏を聞く機会に恵まれた。2日目の朝は中村信博牧師（同志社女子大、京都葵教会代務者）の担当で、静想の時を守った。

2日目は、＜バッハとの対話＞から。ドイツの教会に出席して、讃美歌集の中に「きよしこの夜」が入っていないことに驚く。それは当時の客観的な神の意志を伝える讃美歌という方針から外された模様。讃美歌集を見れば、その教会がどのような教会であり、どのような歴史的、社会的背景を背負っているかがわかると言う。バッハの音楽にも教会史的位置、歴史的、社会的条件が見てとれる。バッハ以前は、作曲家は雇われてつくる音楽職人であり、自分の

好みでつくるのではなく、個性的でも独創的でもない町楽士であったが、そこには、共同体の共同感情の表現が見られたと言う。

しかし、バッハは、ブクステフデとの出会いを通して、彼に触発され、トッカータとフーガ、芸術音楽としては最高の「人よ汝が罪の大なるを嘆け」などを作曲した。その後も真に独創的で、教会音楽的な曲を作曲していった。そこから、楽長型カントールとしてバッハをとらえることもできる。そして、それは最高に



自由であって、他者と共に生きる社会を希求しているものでもあった。バッハが、当時の歴史的、社会的条件の中での可能性のすべてを究めた時、自ずと次の時代に向かう道が開かれていったと言う。ブランデンブルク協奏曲などは、身分制社会批判を孕んだものでもあったと述べている。

わたしたちが歴史と社会のただ中で神に従うことを考える時も、その条件の改善のために、相対的前進に向かって、他者と共に努力をすることである。終末論的に言うならば、神の国を待ち望みながら懸命に共に生きているところに、神の国の先取りがなされ、それを通して永遠に触れることができることと結ばれた。

川端氏の御自身の負の経験を変えながらユーモアに溢れた講演を聞き、また話し合いを通して、キリスト教文化のもつ深さと豊かさに満たされた二日間であった。

報告：入治彦

《参加者アンケートから》

- ・とてもわかりやすく、また体験を通じた、また研究の深さにも裏付けられた内容のお話であり、刺激と、自らの生き方への問いかけを与えられ感謝しています。
- ・オルガンの音がとてもよかったので嬉しかったです。信仰と音楽、讚美について、あらためて考えさせられました。

2008年度 第4回 開発教育セミナー

「日本の農村はどうなっているのか？」 ～ 私たちの食・水・いのち」

2008年8月23日（土）11:30～8月24日（日）15:00
ファシリテーター：松平尚也（AMネット）・山本奈美

世界的な食糧危機についての報道が毎日のように伝えられている。第4回開発教育セミナーは、京都市右京区京北町に移住し、農業に携わりながら食や農、水について現場の視点を生かして発信しているファシリテーターの松平尚也さんのお宅を会場に行った。

1日目には、黒田地区の水源となっている上桂川の用水路や、「山を荒らす」ことで元来の里山の姿を取り戻そうとされてい

る広葉樹の森を地元の方の案内で散策した。一言「農業」と言っても、水路、水利権、地元の活性化等さまざまな要素が絡み合っているということが分かった。夕食後は、「食糧危機と持続可能性」というテーマでファシリテーターのお二人から世界的な動きについてお話を伺った後、参加者で「なぜ食糧危機が起こっているのか？」その原因を出し合い話し合った。バイオ燃料、貿易の自由化、食糧支援という名での

アグリビジネスの支配、食文化の変化等、世界的なさまざまな問題が挙げられ、その中から現在の日本の農家の厳しい現実も見てきた。「自給率を上げる」「農家への所得保障」「地産地消」等が対策として挙げられたが、このことは地球に住む私たちのこれからの大きな課題として継続して取り組んでいきたいことである。

2日目は、松平さんの畑での草引き、じゃがいも植えの農作業の後、全体でふり

かえりを行った。ふりかえりの中では、「実際に農作業を体験し、今まで消費者として語ってきた問題もこれからは色々な角度から見ていきたい」「街に住む者として、農の現場と地域的なつながりを作っていきたい」等の感想が出された。

今回のセミナーをきっかけとし、今後も継続してつながりを持ち私たちの生活のもと、いのちのもととなる「食・農・水」について考えていきたい。報告：友前尚子

2008年度 第3回 生命の意味を問う

「高齢者終末期医療と看取り」

2008年9月6日（土）14:00～17:30

講師：福間 誠之（特別養護老人ホーム洛和ヴィラ桃山医務員、京都橘大学看護学部非常勤講師）

幸いにも日本では、多くの人が高齢まで生きることができるようになった。しかし、心身の衰えた状態でいかに生きるか、どう終末を迎えるかは、どの人にとっても大きな問題である。

今回は、長年脳神経外科医として指導的役割を果たしてこられ、その後ここ10年近くは、老人施設で看取りの役を担ってこられた福間さんに、日本の高齢者医療、福祉制度の現状と、その下における高齢者の終末期の迎え方の例を紹介して頂いた。

複数の慢性疾患を抱えて高齢となり、それぞれの疾患が末期症状となった時、どのような医療が適切なかは判断が難しい。高度に進歩した医療技術を高齢者の末期患者にどこまで適応すべきか、医師も家族もその答えに苦しむ。

最近は多くの高齢者が自宅ではなく、病院で亡くなるようになってきているが、健康保険の改正で在宅療養支援診療所が整備され、在宅での末期医療と、施設での看取りが支援されるようになった。また介護保険の改正により、施設においても看取りが出来るようになった。

生活の場で死を迎える態勢が整えられてきたと言えるが、終末期をどう看取るかは、なお試行錯誤の段階である。

主婦を始め、看護師、医師、牧師も参加し、それぞれの立場から直面している問題が話され、共有された。終末を迎える人だけで

なく、その家族も納得できる看取りができるためには、医師や看護師などの医療従事者、介護者、と家族をつなぎ、精神的に支える人の存在が大きいと感じられた。

報告：小久保正



《参加者アンケートから》

大変丁寧な医療をしていらっしゃる感じが感じられましたが、増加している高齢者に医療者が疲れてしまわないか、働き盛りの人の疲れに答えられるエネルギーが残っているのか気になりました。

第2回京のキリシタン史蹟を巡る
東山編
6月7日(土) 13:00-17:00

6月の洛西編に続き、今回も日本バプテスト連盟京都洛西教会牧師の杉野榮先生にご案内いただいて「京のキリシタン史蹟」を巡った。今回は、先ずカトリック河原町教会で、聖マリア像が安置されている小聖堂を使わせていただいて杉野先生のお話を聞き、その後→耳塚→元和キリシタン殉教地跡→十念寺→大徳寺高桐院を巡回した。次回は、聖母女学院短期大学名誉教授の三俣俊二先生のご案内で伏見編を開催する事になっている。 報告：事務局

《参加者アンケートから》

- ・この度の史跡めぐりでは、三条カトリック教会での説明、証をはじめとして、バスの中の案内、現地説明に溢れる京都への愛、そこに住む人達への福音への誘いの情熱には感動しました。
- ・昔から興味を持っていた事だけに、それなりに本も読みましたが、これだけの史跡があるとは知りませんでした。

第2回お茶こころえの会

修学院で名月を楽しむ
～ お茶とキリスト教の繋がりを学びながら～

9月19日(金) 15:00-19:00

講師：坂部慶夫(坂部医院院長)

お茶こころえの会では初めて講師を招いてのプログラム。まず、お茶の作法にカトリックのミサの所作と共通するところが多くあるという事を紹介するビデオを鑑賞した後に、「聖書のことばと茶のこころ」の著書がある坂部先生からお話を伺った。先生は、動作の共通点も興味深いのが、にじり口で武士も刀を置き、身をかがめて茶室に入るように、茶室の中では身分の上下を問わないという考え方が、神の前にはすべての人が平等であるというキリスト教の信仰に共通していることを強調された

報告：事務局

《参加者アンケートから》

- ・わたしがぜんぜん知らなかった事、とくにキリストとお茶の関係がすごくおもしろかったです。
- ・お茶とキリスト教に共通面があるということについて感銘しました。

2008年度 第5回 開発教育セミナー

「もっと知りたいビルマ
～ 民主化運動の過去・現在・未来」

2008年10月4日(土) 16:00～10月5日(日) 12:00

講師：中尾 恵子(日本ビルマ救援センター)

今回は、日本ビルマ救援センターの中尾恵子さんを講師に迎え、ビルマの歴史と現状について報告をしていただいた。

セッション1では、ビルマで一般的に使われている化粧品や、どの家庭にも貼られているというポスターや日常生活、お祭りの写真を使って、ビルマの文化について

紹介があった。

次に「ビルマなのか、ミャンマーなのか」というテーマで、ビルマ年表をもとに、ビルマがミャンマーと呼ばれるようになった経緯について解説がなされた。その中で参加者は、この国を「ビルマ」と呼ぶ意味、「ミャンマー」と呼ぶ意味について

理解を深めていった。また、日本とビルマとの関わりについての歴史的な関わりについても解説された。このとき、参加者からは「今、アウンサンスーチーはどうしているのか」「アウンサン将軍のもとでの軍と今の国軍は同じものか」「農村、国境付近でも軍政の力は及んでいるのか」などの質問が寄せられた。



セッション2では、2008年5月にビルマを襲ったサイクロンの被害についてのVTRを視聴した。そこには、被害のすさまじさを語る被災者、未だに放置されたままになっている遺体、怪我の手当てもままならない被災者の様子が映し出されていた。中でも印象的だったのは、兵士や幹部たちの被災地に対しての抑圧的な態度であった。

その後、参加者はグループでこれまでの学びを振り返った。このときに参加者からは「外国メディアの取材について規制されているのか」「軍事政権はなぜこんなに長く続くのか」「ビルマ国内の物価高騰の状況は？」などの質問が寄せられ、ビルマの人々に対する軍事政権の圧政の状況が明らかにされていった。

最後に、セッション1、セッション2に

ついて気づいたこと、感じたこと、疑問に思ったことについてグループで振り返った。

セッション3では、日本ビルマ救援センターの活動報告を中心に、ビルマ難民の現状について解説がなされた。VTR「Living on the line」を視聴したのち、ビルマ軍事政府のもとで強制労働や村の焼き討ち、強制移住、略奪、レイプなどの迫害を受けている少数民族の現状について報告された。

最後に、「私たちにできること」についてグループで考え、発表した。

参加者からは以下のような意見が出された。

- ・ビルマに実際行ってみること
- ・知ることの大切さ（知っているつもりが実は知らない）
- ・軍政に葉書きを送る
- ・ビルマのことを回りに広める
- ・本当に支援が必要な人に支援をすることが必要
- ・地道に活動を続けていく
- ・実際にビルマに行って、見てきたことを知らせる
- ・“軍って何？”、“民主主義って？”と問いかてみる（自分たち、日本でも実は同じようなことが起こっているのではないか考える）

自分たちの知らないところで起こっている不条理に気づいた参加者は「知ること」、そして「その気づきを行動に移すこと」の大切さを切実に感じていたようだった。

中尾恵子さんの熱く静かな力に包まれた時間であった。

報告：金山顕子

《参加者アンケートから》

- ・第二セッションで具体的な話をお聞きして、とてもよくわかりました。正直、こんなにひどい状況とは思っていませんでしたのでショックでしたが、真実を知ることができてよかったですと思います。
- ・私自身もいろんな支援活動にかかわっていますが、その支援活動が本当に当事者にとって正しい活動なのか、見直すことの大切さをあらためて気づかせていただきました。

2008年度 第4回 修学院キリスト教セミナー

「実存の教育 ～ 私の詩と真実」

2008年10月11日（土）14:00～17:00

講師：北垣 宗治（同志社大学名誉教授）

第4回の修学院キリスト教セミナーは、同志社大学で36年間、英語、英文学を講じ、敬和学園大学の初代学長を務めた北垣宗治氏を招いて、「実存の教育～私の詩と真実」と題して行われた。

北垣氏は、同志社大学の学生であった当時、友人たちから「実存」というニックネームをつけられた。それは当時流行していたサルトルではなく、キルケゴールに傾倒したことにもよるが、自身の実存を追求することに多大な影響を与えたという。

学生時代は、ギリシャ語、ラテン語、ドイツ語を同時に勉強したけれども毎週予習のために、二晩徹夜を強いられ、極度の疲労と睡魔に襲われた。そのような深夜、「すべて労する者、重荷を負う者、われに來れ。我、汝を休ません」というマタイ福音書の一節が胸に飛び込んで來たという。その瞬間、肩の力が抜け落ち、自分の重荷はすべてイエスに投げかければよい。私が生きているのではなく、生かされているのだという意識に満たされ、その1年後に同志社教会で受洗。

その受洗を最も喜んでくれたのは、同志社のアーモスト館長のオーティス・ケーリ先生だった。彼からはリベラルなキリスト教ではなく、ラインホルド・ニーバーの福音主義に支えられた預言者的な人間観、歴史観の重要性を学んだ。その後、京都教会に転会する。大山 寛牧師の説教には、マルチン・ルターやバニアン在天路歷程などの引用が多く見られ、その徹底した福音主義によって、信仰の礎となる薫陶を受けた。

英文学の主任教授は、同志社大学長、総長をつとめた上野直蔵先生であった。上野先生は、後進の指導に熱心で、北垣氏は助手となり、スコットランドのセント・アンドルース大学に留学することができた。その後、新島襄や内村鑑三の母校であるアーモスト大学に留学。1402頁あるものを2週間で読まされ、レポートを書くことを要求された。日本に帰国後、専任講師となったが、300人の学生たちに講義し、試験を行うと300人中200人が落ちる。英文科随一のこわい教師と言われるようになった。

1990年、北垣氏60才の時、同志社を退職、敬和学園大学設立のために、新潟県新発田市に移った。敬和では学長を勤め、大学の特徴を出すため、敬和を「ボランティアする大学」にする事に努めた。1年に1週間、授業をやめて、社会福祉施設、特別養護老人ホームを見学、奉仕をさせてもらう計画を立て、実行した。こうした体験を通して、初めは気乗りがしなかった学生たちが、体験を通して「施設の子どもたちから元気をもらって帰ってきた」というレポートを書いて來たという。

北垣氏は、現在新島 襄、初期同志社の研究を続けながら、高校生の国際哲学オリンピックの日本組織委員長として活躍しておられる。北垣氏の半生は、正に出会いの教育であり、そのまかれた種が実を結び、さらに実を結んできている所に「あなたのパンを水に浮かべて流すがよい。月日がたってからそれを見い出すだろう」というコヘレトの言葉を思い出した。 報告：入治彦

この時期、セミナーハウス南隣の曼殊院を訪れる観光客で周辺の道路はパンク状態になります。もみじまつり終了後、ハウスから伏見の自宅まで帰るのに3時間以上かかりました。いつもなら45分のドライブなのですが・・・。今年度のプログラムも大半が終了しました。どうぞ報告をお読み下さい。（編集子）

編集発行人：小久保 正（関西セミナーハウス活動センター運営委員長）

発行所：（財）日本クリスチャンアカデミー 関西セミナーハウス活動センター

〒606-8134 京都市左京区一乗寺竹ノ内町 23 電話：075-711-2115 FAX：075-701-5256

E-メール：office@academy-kansai.org ホームページ：http://www.academy-kansai.org/